

「主のしもべの歌」(後半A)

「イザヤ書」からの説教 (No.8)

【聖書箇所】 50章4～9節、52章13～15節



ベレーシート

●前回到続いて「主のしもべの歌」の後半、すなわち、四つの「主のしもべの歌」の第三と第四の歌について取り上げます。第四の歌では、今回はその序文の部分のみ取り上げます。

●四つの「主のしもべの歌」の箇所、および「歌い手」、そしてそれぞれの特徴のチャートを提示すると以下ようになります。内容が共通している部分もありますが、四つの歌を総合することではじめてイエシュアのご性質や働き全般が見えてきます。

No.	聖書箇所	歌い(語り)手	特徴
第一	42:1～9	「主」	●国々に公義をもたらすこと。「公義」とは「ミシュパート」(מִשְׁפָּט)、すなわち、神の統治(支配)をこの地上にもたらすこと。どのようにしてその統治をもたらすかと言えば、それは「みことばの回復」によって。
第二	49:1～6	「主のしもべ」	●「みことばの回復」の武器として、しもべの口が鋭い剣のように、また、とぎすました矢として用いられるために、時が来るまで、主の中に隠され、備えられるということ。●また、主のしもべの召命の目的がイスラエルの回復のみならず、異邦人の救いをももたらすこと。
第三	50:4～9	「主のしもべ」	●主のしもべは「耳を開かれた」(従順な)者として、受難をも引き受け、喜んで、主に従っていく者であること。
第四	52:13～ 53:12	①52:13～15は「主」 ②53:1～12は「イザヤ」	●主のしもべは賢く行動して与えられた任務を成功させて高揚される。 ●と同時に、受難の真の理由は人々の罪のためであり、しかもそれは与えることを喜びとする主のみこころ、すなわち、「ヘーフェツ」(חֶפֶץ)の愛に基づいていることが明らかにされる。

1. 第三の「主のしもべの歌」(50章4～9節)

【新改訳改訂第3版】イザヤ書 50章 4～9節

50:4 神である主は、私に弟子の舌を与え、疲れた者をことばで励ますことを教え、

朝ごとに、私を呼びさまし、私の耳を開かせて、私が弟子のように聞くようにされる。

50:5 神である主は、私の耳を開かれた。私は逆らわず、うしろに退きませず、

50:6 打つ者に私の背中をまかせ、ひげを抜く者に私の頬をまかせ、

侮辱されても、つばきをかけられても、私の顔を隠さなかった。

50:7 しかし、神である主は、私を助ける。それゆえ、私は、侮辱されなかった。

それゆえ、私は顔を火打石のようにし、恥を見てはならないと知った。

50:8 私を義とする方が近くにおられる。だれが私と争うのか。さあ、さばきの座に共に立とう。

どんな者が、私を訴えるのか。私のところに出て来い。

50:9 見よ。神である主が、私を助ける。だれが私を罪に定めるのか。

見よ。彼らはみな、衣のように古び、しみが彼らを食い尽くす。

(1) 朝ごとに、しもべの耳を開かれる主

●この歌を歌っているのは「私」です。この「私」は「主のしもべ」であり、「イエシュア」を示唆しています。まずは、4節にのみ注目してみましょう。ここには「神である主」と「私」とのかかわりが示されています。

神である主は、私に弟子の舌を与え、疲れた者をことばで励ますことを教え、
朝ごとに、私を呼びさまし、私の耳を開かせて、私が弟子のように聞くようにされる。

①「弟子の舌」

●「弟子」とは複数形で「教えを受けた者たち」という意味です。「舌」はその教えを語る器官であり、預言者的な務めをする者にとってはきわめて重要な器官です。主はことばを語る(教える)「舌」を主のしもべに与えられるのですが、それは「疲れた者をことばで励ます」ためです。ここでの「ことば」とは「ダーヴァール」(דָּבָר)ですが、その源泉は常に「主の教え(トラー、תּוֹרָה)」です。詩篇 19 篇には「トラー」の賛歌があります。

【新改訳改訂第3版】詩篇 19 篇 7～11 節

19:7 【主】のみおしえは完全で、たましいを生き返らせ、

【主】のあかしは確かで、わきまえない者を賢くする。

19:8 【主】の戒めは正しくて、人の心を喜ばせ、

【主】の仰せはきよくて、人の目を明るくする。

19:9 【主】への恐れはきよく、とこしえまでも変わらない。

【主】のさばきはまことであり、ことごとく正しい。

19:10 それらは、金よりも、多くの純金よりも好ましい。蜜よりも、蜜蜂の巣のしたたりよりも甘い。

19:11 また、それによって、あなたのしもべは戒めを受ける。それを守れば、報いは大きい。

●これはトラーという神からの贈り物を包む包装紙、あるいは広告のようなものです。原文では7～9節は6行からなるきわめて美しい構成がなされています。しかしここで言われていることが百パーセント、アーメンと言えるのはメシア王国においてです。私たちがみことばをどんなに味わおうとしても、今はそのトラーのごくわずかなすばらしさしか味わうことができません。味見程度です。しかしメシア王国では十全にそれを味わうことができるのです。しかもその時が来たならば、メシアが王として統治されるシオンにすべての国々から主のおしえを求めて来るようになることが預言されています。イザヤ2章がそのことを預言しています。

2:2 終わりの日に、【主】の家の山は、山々の頂に堅く立ち、丘々よりもそびえ立ち、すべての国々がそこに流れて来る。

2:3 多くの民が来て言う。「さあ、【主】の山、ヤコブの神の家に上ろう。主はご自分の道を、私たちに教えてくださる。

私たちはその小道を歩もう。」それは、シオンからみおしえが出、エルサレムから【主】のことばが出るからだ。」

②「疲れた者をことばで励ますことを教え」

●「疲れた者」とは、何らかの重荷を担うことに疲れた者(単数)、またあるいは、罪、災い、試練などの重荷に耐えかねている者かもしれません。そのような者に対して、神は神のことばをもって励まそうとされるのです。なぜなら、「人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばによる。」とあるように、神のことばには人を慰め、励ます力があるからです。そのことを主のしもべに教えるために(原文では「しもべが知るために」)、「朝ごとに」「呼びさま」す必要があったのです。

③「朝ごとに、私を呼びさます」

●「朝ごとに」は、原文では「バ・ポーケル」(בְּבֹקֶר)を二回繰り返しています。それは強調を表現するヘブル語の修辞法で、「朝ごとに、毎朝、来る日も来る日も」という意味です。そのようにして、主はしもべの耳を「呼びさます」(「ウール」וּוּרの未完了、使役形)のです。この動詞は二回使われていますが、新改訳では一回目は「呼びさます」と訳し、二回目は、しもべの耳を「開かせて」と訳しています。つまり「呼びさます」とは、「耳を開かせる」と同義だということです。

④「私の耳を開かせる」

●4節の最後の行は、「私が弟子のように聞くようにされる」と訳されていますが、原文は「弟子たちのように聞くために」です。ちなみに、ここの「聞くため」は「聞く」(「シアマー」שָׁמַע)の不定詞です。旧約聖書で「聞く」とは「従う」ことを意味します。

●5節には「主は、私の耳を開かれた」とあります。ここでの「開かれた」という原語は「パータハ」(פָּתַח)です。それは文字どおりの「開く」を意味しますが、同時に「なぞを解き明かす」という意味もあります。そのために、4節にあるように、主は弟子のように、しもべが従順に「聞く(従う)」ために、朝ごとに「呼びさまし」「耳を開かせ」るようにしたのです。ここにはいわば「従順用語」がたたみ掛けるように使われています。

●以上のように、「第三のしもべ」の特徴は、自発的な従順なしもべです。「耳を開かれる」というフレーズは従順を意味します。ちなみに、詩篇40篇6節にも「あなたは私の耳を開いてくださいました。」とあります。その意味は、同じく8節に「わが神。私はみこころを行うことを喜びとします」と説明されています。「耳を開くこと」と「みこころを行うことを喜びとする」ことが同義であることが分かります。ところが、ここでの「耳を開く」と訳された原語は「カーラー」(כָּרַח)という動詞で、旧約では15回、詩篇では6回(7:15/22:16/40:6/57:6/94:13/119:85)使われています。

●本来、この動詞は「穴を掘る、穴をあける、刺し通す」という意味です。この「耳を開く」という言葉の由来は、出エジプト記21章に記されています。それによれば、6年間、強制的に義務として仕えてきた奴隷が7年目に自由の身となるにもかかわらず、そのあとも、自ら主人のもとで自発的に仕えたいと決心した者は、公に、自分の耳をきりで刺し通さなければなりません。それは、奴隷にとっての、主人に対する目に見える「愛

のしるし」「従順のしるし」でした。そこから、しもべが「耳を開く」とは、主人にとっては「からだ全体」を受け取ることを意味するようになりました。それゆえ、ヘブル人への手紙 10 章 5 節では「あなたは、いけにえやささげ物を望まないで、わたしのために、からだを造ってくださいました。」と引用されています。「耳を開く」ことが「からだを造る」こととして解釈されています。そこには隠された深い意味があるのです。

●「からだ」は、神のみこころを行うために絶対に必要なものであるということです。また、主に対する愛と従順のあかしを立てるために不可欠なものだということです。これは、やがてメシア王国(千年王国)においても、その後の「新しい天と新しい地」においても、神がなぜ私たちに朽ちないからだを与えられるのかの答えです。メシア王国(千年王国)も「新しい地」も、そこでは朽ちないからだを与えられて、永遠に神に仕える世界です。そのためには「からだ」が不可欠なのです。からだのない霊的な世界ではなく、からだをもって交わる世界だからです。ここにキリストの花嫁が「キリストのからだ」と呼ばれるヘブル的所以があるように思います。

●再び、イザヤ書 50 章に戻りますが、5 節の「**耳を開かれる**」ということばは、第三の「しもべの歌」においては、神のみおしえ(トラー)を学ぶことを意味します。メシアであるしもべが神の任務を全うするためには、しもべ自身がまず神の御声を十分に聞くようにされなければなりません。それは「学ぶ」ことを意味します。神のことばを人に教えるためには、教える者自身がまず学ばなくてはならないのです。耳を開かれることによって、神の教えについての知恵、洞察力、説得力が与えられます。学ぶ力と教える力を身に着けることを、聖書は「耳を開かれる」と表現するのです。「耳を開かれる」という「パータハ」(פָּתַח)は、語彙としては異なりますが、意味としては「カーラー」(קָרָא)ときわめて近いものがあります。イエシュアの公生涯の前の日々は、まさにそのために費やされたと言えます。

●「主よ。わたしの目を開いてください。」「主よ。わたしの耳を開いてください。」という祈りの歌を私は作りましたが、メロディーをつけずとも、この祈りは「毎朝」、みことばを瞑想する時に祈るべき祈りだと信じます。そうするなら、みことばの中に隠された秘密を知り、神に従う新たな思いが来るのです。みことばの回復とはそのような日々の中に実現していくものだと思えます。主を愛することは、主のおしえ(みことば)を愛することです。

(2) 従順なしもべの苦難に対する不退転の決意

●「耳を開かれる」とは、神の御声を十分に聞くようにされるだけでなく、たとえ迫害や恥辱を受けたとしても、主を信頼し喜んで従って行くことを意味します。後戻りは許されません。再度、イザヤ書 50 章 5 節以降を見てください。

【新改訳改訂第 3 版】イザヤ書 50 章 5～9 節

- 5 神である主は、私の耳を開かれた。私は逆らわず、うしろに退きもせず、
- 6 打つ者に私の背中をまかせ、ひげを抜く者に私の頬をまかせ、

侮辱されても、つばきをかけられても、私の顔を隠さなかった。

7 しかし、神である主は、私を助ける。それゆえ、私は、侮辱されなかった。

それゆえ、私は顔を火打石のようにし、恥を見てはならないと知った。

8 私を義とする方が近くにおられる。だれが私と争うのか。

さあ、さばきの座に共に立とう。どんな者が、私を訴えるのか。私のところに出て来い。

9 見よ。神である主が、私を助ける。だれが私を罪に定めるのか。

見よ。彼らはみな、衣のように古び、しみが彼らを食い尽くす。

①「逆らわず、うしろに退きもせず」(5節)

●しもべは大胆に神のことばを伝えることで、迫害や恥辱を受けることが定められています。しかし主のしもべは、それらに躊躇することなく、完全に喜んで、不退転の決意をもって従って行きます。

②「打つ者に私の背中をまかせ、ひげを抜く者に私の頬をまかせ、侮辱されても、つばきをかけられても、私の顔を隠さなかった。」(6節)

●ここには主体的に、自発的に自ら進んで忍耐をもって苦難を受けるしもべの姿があります。「髭を抜かれる」とは屈辱と侮辱を意味します。このような最低の侮辱は、いかなる人間といえども甘受することは出来ません。しかしまさにメシアこそ、この恥辱的な苦難を自ら受けられるのです。この苦難はイザヤ書 53 章の「第四のしもべの歌」でクライマックスに達します。

③「主は、私を助ける。それゆえ、私は、侮辱されなかった。」(7節 a)

●「侮辱されなかった」とはどういうことでしょうか。事実、侮辱されるのです。でもなぜか、「侮辱されなかった」とあります。それはしもべが主を信頼し、主の助けの保障があるので、恥辱と屈辱の中にあっても耐えられるという意味だと考えます。

④「顔を火打石のようにし」(7節 b)

●「火打石」とは最も堅い石を意味するところから、どんなことがあってもひるまない確固さを意味します。

⑤「恥を見てはならないと知った」(7節 c)

●原文では「私は恥を見ないということ、私は知った」です。旧約聖書で「恥を見る」という表現は失望落胆することを意味します。しかしそれがここでは否定されています。つまり、主に従うなら、決して失望させられることがないのだ、という確信が与えられたという意味です。

⑥「見よ。神である主が、私を助ける。だれが私を罪に定めるのか。見よ。彼らはみな、衣のように古び、しみが彼らを食い尽くす。」(9節)

●これは従順による勝利を宣言していることばです。

2. 第四の「主のしもべの歌」の序文(52章 13~15節)

●第四の「主のしもべの歌」(52章 13節~53章 12節)は「主のしもべの歌」の中でも、クライマックス的位置を有しています。ここだけでも一冊の本になるだけの内容をもっています。

●旧約聖書において、メシアによる贖罪的受難(代償的受難)を鮮やかに預言している最高峰とえばイザヤ書 53章です。神のマスタープランにおける「神の恵みの福音」の真髄がここに預言されています。

●使徒の働き 7 章に、エチオピアの宦官がエルサレムを去って、ガザに向かっていたとき、彼はイザヤ書 53 章を朗読していました。宦官は「ほふり場に引かれていく羊のように、毛を刈る者の前で黙っている雌羊のように、彼は口を開かない。しいたげと、さばきによって、彼は取り去られた。彼の時代の者で、だれが思ったことだろう。彼がわたしの民のそむきの罪のために打たれ、生ける者の地から絶たれたことを。」という句の意味が分かりませんでした。そこで彼は、主の御使いによって導かれて近づいてきた伝道者ピリポに尋ねました。「ここで預言者はだれのことを言っているのですか。自分のことですか。それとも、だれかほかの人ですか。」と。この問いに答える形で、ピリポは宦官に、この句から始めてイエシュアのことを宣べ伝えたのでした(使徒 8:35)。ここで「答えた」とは記さずに、「宣べ伝えた」とルカは記しています。この「宣べ伝える」という動詞「ユー・アンゲリゾー」(εὐαγγελίζω)は、良き知らせとしてイエス・キリストのことを伝えたことを意味します。

●ところで、エドワード・J・ヤングは、52 章の末尾にある 3 つの節(52:13~15)を 53 章の序文として位置づけています。つまり、53 章で預言者イザヤが語る内容をコンパクトにまとめているということです。しかもその三つの節の語り手は「主」です。その「主」が「見よ」と注目させているのは「主のしもべ」です。今回は、時間の関係から、この序文の部分を取り上げることとし、53 章は次回に取り上げたいと思います。まずはその序文の聖書箇所を見てみましょう。

【新改訳改訂第 3 版】イザヤ書 52 章 13~15 節

13 見よ。わたしのしもべは栄える。彼は高められ、上げられ、非常に高くなる。

14 多くの者があなたを見て驚いたように、

——その顔だちは、そこなわれて人のようではなく、その姿も人の子らとは違っていた——

15 そのように、彼は多くの国々を驚かす。王たちは彼の前で口をつぐむ。

彼らは、まだ告げられなかったことを見、まだ聞いたこともないことを悟るからだ。

(1) 「主のしもべ」の任務は成功に終わる

●13 節の冒頭の「見よ。わたしのしもべは栄える」とは、「主のしもべ」が与えられた任務を果たして成功するという公言です。「栄える」と訳されたヘブル語の「サー・ハレ」(שָׂרָה)は、本来「成功する、戦果をあげる」という意味ですが、ヒフィル(使役)態では「賢くふるまう、賢く行動する、思慮がある、栄える」の意味になります。つまり第四の「主のしもべ」の歌は、主のしもべに与えられた任務が成し遂げられて、成功するということが強調されているのです。

●主のしもべは与えられた召しの目的を果たしますが、そのためには大きな苦難を伴うことが、すでに第二、第三の「主のしもべの歌」の中にも示唆されています(49:4、50:6)。しかし第四の「主のしもべの歌」(53 章)では、「主のしもべ」がなぜ苦難を受けなければならないか、その真の理由が明示されています。それが第四の「主のしもべの歌」の特徴です。

(2) 主の「高挙」と「受難」

①主の高挙

●受難の中においても、主を最後まで信頼したがゆえに、主のしもべが高挙されることが記されています。イザヤ書 52 章 13 節は下記の三つの類語的な動詞を並べることによって、しもべの高挙が最高峰のものであることを強調しようとしています。ちなみに、その三つの動詞とは以下のものです。

- ①「ルーム」(רָם)・「上げる、高める、高く上げる」の意。
- ②「ナーサー」(נָסַר)・ニファアル(受動)態で「上げられる、あがめられる」の意。
- ③「ガーヴァハ」(גָּוַהַר)・「高くなる」の意。この語彙に「非常に」という意味の「メオード」(מְאוֹד)が付け加えられています。

●主のしもべの受難と高挙というテーマは、使徒パウロがピリピ教会に宛てた手紙の中に記されています。

【新改訳改訂第3版】ピリピ人への手紙 2 章 6～11 節

- 6 キリストは神の御姿である方なのに、神のあり方を捨てられないとは考えず、
- 7 ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられました。人としての性質をもって現れ、
- 8 自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われました。【受難】

- 9 それゆえ神は、この方を高く上げて、すべての名にまさる名をお与えになりました。
- 10 それは、イエスの御名によって、天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるものすべてが、ひざをかがめ、
- 11 すべての口が、「イエス・キリストは主である」と告白して、父なる神がほめたたえられるためです。【高挙】

②主の「受難」

●「受難」と「高挙」はきわめて対照的な出来事です。プロセスとしては、「受難」の後に「高挙」が来るのですが、イザヤ書 52 章ではまず「高挙」(13 節)が強調され、その後にもべの「受難」(14 節)が示され、その理由(15 節)が記されるという構成になっています。

③ 主のしもべに対する「驚き」

【新改訳改訂第3版】イザヤ書 52 章 14 節

多くの者があなたを見て驚いたように、——その顔だちは、そこなわれて人のようではなく、その姿も人の子らとは違っていた——

●14 節の「驚いた」は「主のしもべ」の顔が人とは思われないほどに損なわれてしまうところの「色を失うような」「ぞっとするような」驚き、あるいは、おののきを意味する動詞です。ヘブル語では「シャーマム」(שָׁמַם)です。事実、主のしもべなるイエシュアの肉体は、十字架において、ローマ軍の兵士によるリンチを受けます。イエシュアの肉体は、打撲傷、裂傷、刺傷、貫通傷、破裂という五種類の傷を受けます。映画などでは顔はまだ見ることができますが、実際には、人の面影を失うほどの損傷を受けることが預言されています。おそらく顔だけでなく、肉体全体が膨れ上がり、人の肉体とは思えないほどの様相になってしまったと考えられます。ちなみに「シャーマム」(שָׁמַם)は、自然界の「地」に対しては「荒廃する」、土の「器」に対しては「壊される」、道徳に対しては「墮落する」(ノアの洪水前の状態)、人間の姿に対しては「正常な形が損なわれてしまった」とい

う意味で使われています。そのような「主のしもべ」の受難は、さらなる「驚き」を与えることが預言されています。

【新改訳改訂第3版】イザヤ書 52章 15節

そのように、彼は多くの国々を驚かす。王たちは彼の前で口をつぐむ。

彼らは、まだ告げられなかったことを見、まだ聞いたこともないことを悟るからだ。

●15節では「彼は多くの国々を驚かす。王たちは彼の前で口をつぐむ。」とあります。後者の「口をつぐむ」とは、沈黙してしまうことを意味し、前者の「驚かす」は、受難の結果としてもたらされる「驚き」です。喜びと沈黙の「驚き」をめぐってさまざまな解釈があるようです。以下、三つの解釈をあげたいと思います。

●15節の「驚かす」のヘブル語は「ナーザー」(נָאָר)の使役態です。「驚き」は主のしもべの受難に対するショッキングな感情を表す語彙ですが、その内容も程度もさまざまに解釈されます。

(a) 人々(多くの国々、王たち)をきよめるために血をふり注いだという解釈

●「ナーザー」は祭司たちが着る白い亜麻布の装束をきよめるために、祭壇から取った血をその装束に「ふり注ぐ」という意味があります(出 29:21)。白い亜麻布に動物の赤い血がふり注がれることによってきよめられるという祭司的務めにおける「驚き」という解釈。

(b) 多くの人々を喜びで満たすという解釈

●「ナーザー」にはもう一つ、「跳び上がるほど喜ぶ」という意味があります。自分のいのちを贖いの代価として与えることの喜び、神のみこころを満足させる(神が喜ぶ)という意味の「驚き」という解釈。

(c) 前代未聞の受難に対する解釈

●「まだ告げられなかったことを見、まだ聞いたこともないことを悟るから」とあるように、主のしもべの受難と死、そして高く上げられたその姿に対する深い敬意と畏れのゆえの「驚き」という解釈。この解釈は(a)も(b)も含ませることのできる解釈とも言えます。

最後に

●神のご計画(マスタープラン)は完璧であり、必ず、成就します。驚かされるのは、神の御子イエシュアがからだをもってこの世に来られること、そしてその使命を果たすことは、イエシュアが実際に歴史の中に登場する6～700年前から預言者イザヤによって預言されていたということです。そしてその預言されたとおりの出来事(「ダーバール」 דַּבָּר)が起こりました。とすれば、なおのこと、私たちはイエシュアが再び王として来られて、この地にメシア王国が打ち建てられるという「御国の福音」のすばらしい出来事(「ダーバール」 דַּבָּר)についても、もっともっと謙虚に、そして熱心に、かつ注意深く学びつつ、その福音のすばらしさに目が開かれることによって、その到来を大きな期待をもって待ち望む者とならなければなりません。

マラナ・タ 2014.11.9